



Japan Intellectual Property Association

Special INTERVIEW

佐藤 廣士 日本知的財産協会 会長
株式会社神戸製鋼所 顧問

わが社のこだわり

株式会社 安川電機

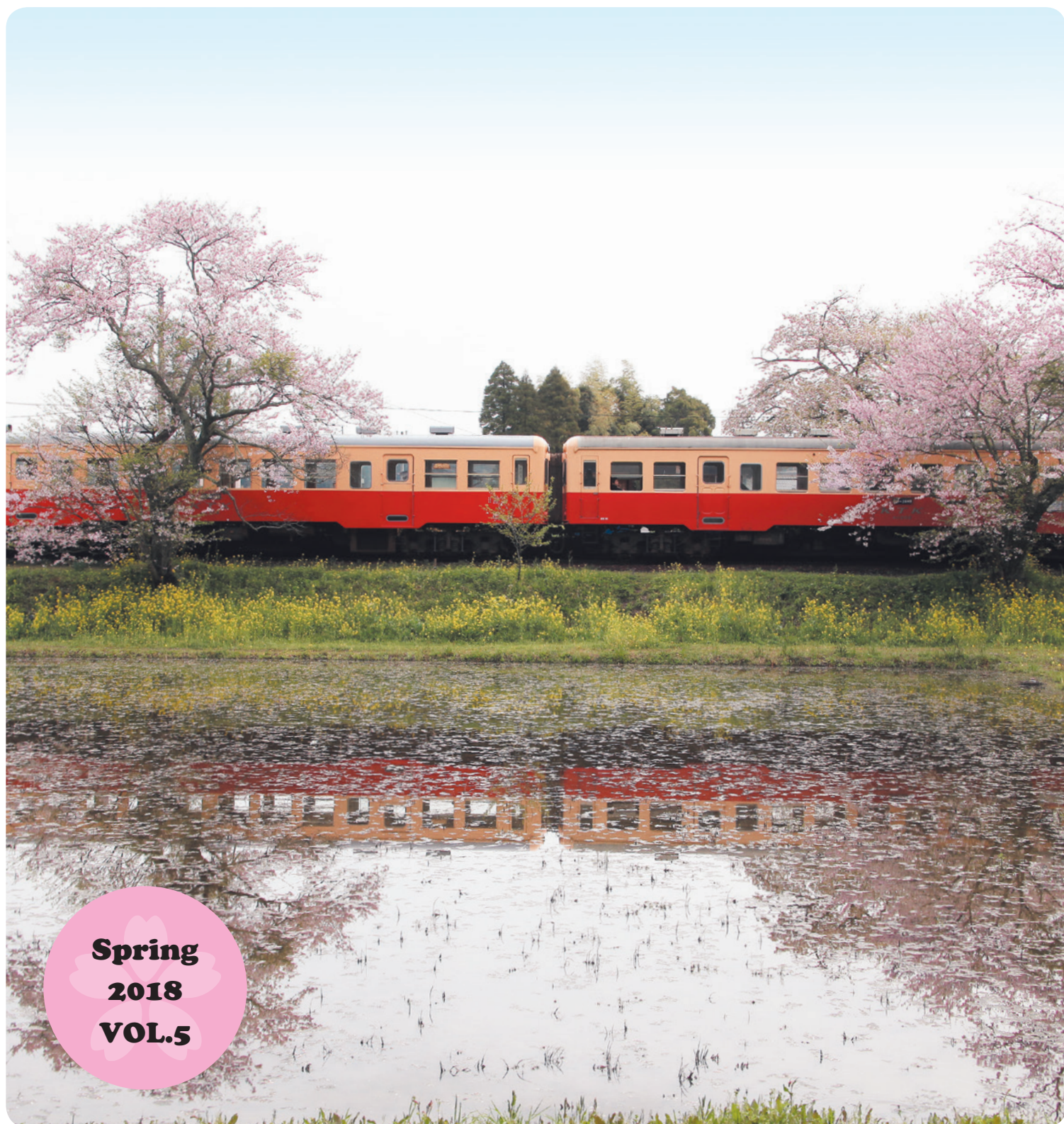
『世界初・世界一の技術へのこだわり』

ZOOM UP

少数知財研究会（関西）

JIPA通信

「知財管理」誌 特集号



**Spring
2018
VOL.5**

産業構造が大きく変化する時代、日本知的財産協会を牽引しておられる佐藤会長に、足立副理事長がインタビューを行った。

ボーダーレス時代の知財部員

足立 佐藤会長は、2004年

から2005年にJIPAの副会長を務められ、この度、改めて会長に就任していただきましたが、この間で大きく変化していると感じられるようなことはありますか。

佐藤 世の中がこの14年で随分変わったと思いますし、JIPAシンポジウムでの議論も随分変わってきたという感じがしています。副会長のときは、職務発明の取扱いがメインの議題でしたが、今は、経済成長戦略に必須であるイノベーションに関するAI、IoT、ビッグデータ、再生細胞などの先進技術の知財のあり方が議論されています。

また、例えばTTPで知財が争点の一つとなるなどグローバルな規模でなされていて、政治も経済も知財抜きでは考えられない時代になっています。さらに、価値観が多様化する中、多様性を持たせた意思決定も必要となってきています。JIPAの活動も、そういった変化を踏まえた活動の比重が

非常に大きくなっていると感じています。

足立 その意味で、知財の人材にも求められるものが大きく変わってきているかと思いますが、知財部門の機能なども含めて、ご自身の経験から示唆していただくようなことはありますか。

佐藤 私が研究開発のトップマネジメントをしていたころの経験ですが、人材育成の視点で社内プロジェクトを推進しました。事業部門横断的な組織を作り、その中で片道切符でない人事異動を積極的に実施しましたが、これは、これからの知財部門の体制作りにも参考になると思います。

私は、これからの知財部門にはスペシャリストだけでなく、ジェネラリストも必要だと考えていて、その構成も、6割がジェネラリスト、3割がスペシャリストというくらいイメージです。プロジェクトに入ってもらって、色々と経験し、広い視野を持って戻ってきてもらうことで、多様性を持ったジェネラリスト人材が育成できるのではと考えています。



Special INTERVIEW No.005

価値観の多様化に伴い 知財部門は広い視野を持ち 経営者を後押しする役割を

佐藤 廣士 Hiroshi Sato (写真左)

日本知的財産協会 会長／株式会社神戸製鋼所 顧問

足立 和泰 Kazuyasu Adachi (写真右)

日本知的財産協会 副理事長

／パナソニック株式会社 知的財産センター IPマネジメント担当上席主幹



世の中が多様化していて価値観も多様化している。そのような経験をしているというのは大きなキャリアパスになると思います。

また、価値観が多様化して、グローバルに広がっている中、少人数でいいから、悩める経営者に戦略論をインプットできるスタッフが必要です。政治、経済、技術などの動向を見ながら、知財をどう生かすかというのを社長に答申できる組織といえますか、人の集団が望まれています。今の知財部門は、社長に対して、次の中期戦略はこういうことでどうでしょうか、ということを進言できる時代になっていると思います。

知財部員には技術開発と本社戦略とのスタッフ機能をこなせる能力を養ってほしいと思います。

異業種の交流が大事

足立 そういう意味で知財部門のダイバーシティを気にかけないといけないということですね。

佐藤 そこで重要だと思うのは、異業種の「交流」の場だと思っています。私の中では、異業種の「連携」と異業種の「交流」と2つに分けています。異業種の「連携」というのは、ビジネスを一緒にやるということと

ろから始まるので、参加するときも会社の身分で参加し、しづらみも多くなります。一方、異業種の「交流」の場合は、思想とかビジョンを持っている人と仕事を離れて交流する場を持つことです。私は、この異業種の「交流」を大事にしているんですが、それは、自分の考えをあまり着飾らずにストレートに言える関係を持つことではじめて見えてくる相手の方の思想とかビジョンがすごく参考になるからなんです。

経営者にも寄り添う知財

足立 最後にJIPAに今後期待することをお願いします。

佐藤 発明者に寄り添う知財という時代から、経営者にも寄り添う知財であってほしいと思います。

経営というのは流れが大事です。つまり、全体を俯瞰する「鳥の目」、近くによつて拡大し本質は何だろうという「虫の目」、それに加えて、潮の流れ目をみる「魚の目」というものが経営においては大事になります。ビジネス計画を立てる上で経営者の判断を後押ししてあげるような知財部門であってほしいし、JIPAには、このような知財部門を作り上げていく役割を果たしてほしいと期待しています。

わが社のこだわり [株式会社 安川電機]

『世界初・世界一の技術へのこだわり』

小笠原 浩 Hiroshi Ogasawara
株式会社 安川電機 代表取締役社長

YASKAWA



MOTOMAN-BMDA3



安川電機は1915年の創業時から、「外国製品の模倣をもって足れりとせず」という、独自技術で世の中に貢献することを会社の方針に掲げてまいりました。創設者の思いは今も変わらず、世界初・世界一の技術に挑戦し続けています。私も、技術陣には「世界初・世界一になれる可能性がない技術は要らないぞ」と叱咤激励しています。このたびは、第4次産業革命を支えるロボットメカへの注目が高まる中、当社の「こだわり」を紹介する機会をいただき、誠にありがとうございました。

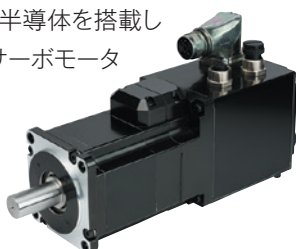
当社は、JIPAサテライト研修の地方会場として、北九州市の本社講堂を提供させていただいていますが、今後もJIPAの活動の地方展開に大いに期待します。また、中央省庁へのご意見番としての活動も期待しています。

産業用電気品へのこだわり

安川電機は炭坑用のモータ等の産業用電気品からスタートしました。昭和30年代には民生用にも手を広げたこともありましたが、産業用エレクトロニクス技術（モータ制御に電子製品を取り込む）によって、「産業用電気品」に注力することとしました。当社の安川第五郎会長が1964年の東京オリンピックの組織委員会会長を拝命する数年前です。その電子（デジタル）技術の活用により、製鉄所の高炉用電気品システムでは、現在でも国内シェア100%です。

サーボモータへのこだわり

当社のDCサーボモータ「ミナーシャモータ」の発明（1958年）が、油圧・空気圧サーボの時代から高精度電気式サーボの時代へのさきがけとなりました。位置決め精度の良さから当初は大形計算機用モータとして使われましたが、その高精度なサーボモータ技術・制御技術を応用した製品が産業用ロボットにつながっていきます。写真は2017年に発売した世界初のGaNパワー半導体を搭載したアンプ内臓サーボモータ（Σ-7F）です。



インバータへのこだわり

渦電流継手付き可変速誘導電動機VSモータ（1953年発売）以来、誘導電動機を可変速制御する技術には世界初・世界一の技術を自社開発したり、最新のパワー素子を世界初で採用したりしてきました。例えば、「トランジスタインバータ」、「すべり周波数形ベクトル制御インバータ」、「IGBTインバータ」、「3レベルインバータ」、「マトリクスコンバータ」などは、市場に出た製品としては世界初のもです。写真はクレーン用インバータの最新機種CR700です。



環境用電気品へのこだわり

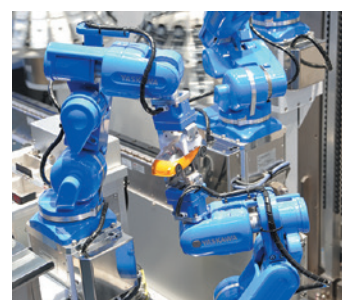
風力発電や太陽光発電という新市場開拓にチャレンジしています。写真は太陽光発電システムの電力変換機となるパワーコンディショナーにおいて、PID現象対策用感電防止機能を標準機能として持つ新製品（Enewell-SOL P2H）です。



ロボットへのこだわり

当社が展示会で「目のあるロボット」を発表したのは1970年、直交座標型アーク溶接ロボットを発表したのは1974年ですが、現在の垂直多関節型ロボット（当時は5軸（5自由度））を製造販売し始めたのは1978年からです。第一号機は自動車部品メーカーさんの九州の工場に納入されました。その後、双腕タイプの産業用ロボットを最初に市場に出したのも当社です（2005年。写真上は最新機種）。

2015年の創立百周年を記念して開館した「安川電機みらい館」でロボット等を使った常設展示をおこなっています。写真はその展示のひとつで、数台の小さなロボットが、協・分業してミニカー（当社の登録意匠第1529573号「自動車おもちゃ」）を組み立てています。2017年の日本経済新聞賞（最優秀賞）を受賞したのは、この「MotoMINI」（産業用6軸ロボットとして世界最小）です。



少数知財研究会(関西)では、関西を中心に知的財産部門の人数が10名以下の会社が集まり、活動しています。

JIPA関西事務所にて年に1回開催されていた中少数知財会員フォローアップ会を起源とし、その参加者からの「継続して議論する場が欲しい」という声を受けて中少数でも参加しやすい研究会形式で2013年に生まれました。私自身は、これまで情報システム委員会、ライセンス委員会に参加したことがあります。ライセンス委員会では委員長も務めさせて頂き、会社の仕事だけでは得られないものを多く経験することができました。

しかしながら、少数規模の知財部門では委員会への参加に躊躇するケースもあると思います。そこで、少数規模でも参加しやすい議論する場を設けることで、会社の中だけでは得られない情報や知見を得られれば、と思い活動しております。

研究会では、リソース不足に起因する課題を中心に議論をしており、中でも少人数故の課題となりやすい「管理・戦略」

と「人材育成」をテーマとして検討しています。「管理・戦略」への取り組みでリソースを効果的に活用すると共に、「人材育成」を積極的に進めて知財に関与する人のレベルアップを図ることで、組織の力を高めることを狙っています。また、その時々々に旬の話題や各社が抱えている問題について議論することもあります。

研究会は何かの問題に対する答えを得る場ではなく、そこで議論したことを基にして、結論は各社が出すものと考えています。それぞれの環境によって結論は異なるものだからです。

ただ、少数規模の組織では判断のための材料が不足することが多くありま

す。特に、判断するために必要な感覚や世間動向・実態といったものが集めにくい環境です。研究会は、議論を通じて不足する判断材料を得る場として機能しています。そのような判断材料となる感覚のことを研究会では「相場感」と言っています。議論に参加したメンバーから意見を聞き、自ら判断するのに必要な「相場感」を得ることが最大の成果だと思っています。

研究会では、JIPA加入の少数知財の会社が、他では得られない知財に関する情報を得るとともに、身近な問題解決の判断をするための「相場感」を共有する場としてこれからも機能し続けていければ、と思います。



全体で各社の課題について討議



グループで成果まとめ

JIPA通信 「知財管理」誌 特集号

毎年「知財管理」誌4月号は特集号として、会誌広報委員会がメインテーマを決めて、そのテーマに沿って「知財管理」誌一冊のほぼ全ての論説を企画しています。そして、第4次産業革命を発端として日本国内の知財情勢が大きく変化しているという潮流を捉え、今年4月号の特集号のメインテーマを「知財のターニングポイント」としました。今回の特集号では、日本のみならず世界の知財に関する動きを紹介しています。また、他誌にはあまり見られない知財業務や戦略に関する具体的な事例や、今後の人材育成についても取り上げています。ぜひ今年の特集号をお楽しみ下さい。



会誌広報委員会

表紙の写真は…

「里山にて」

鹿島建設株式会社 総務・人事本部 山上 宏介

小湊鉄道は、内房線五井駅から安房小湊を目指していた路線です。橋梁やトンネルや駅舎が、大型重機がない大正末期に竣工した当時の姿で活用されています。このことが地域の近代化の歴史を伝えてっていると評価され、2017年5月に国の登録有形文化財となりました。また、養老渓谷駅前の舗装を剥して森を復活させるなど、鉄道を沿線の里山環境の一部とらえて地域住民との協働による里おこし活動を行い、「暮らしの中にある鉄道の風景の質を高めていこうとするデザイン思想が優れている」として、2017年度グッドデザイン賞に選ばれました。

本誌では、表紙写真を募集しています。テーマは季節感があり、できれば技術、特許、知財、デザインに関連があるもの。写真と説明文を[会誌広報グループ kikansi@jipa.or.jp](mailto:kikansi@jipa.or.jp)宛てにお送りください。また、「わが社のこだわり」のほか、ぜひ取り上げて欲しいというテーマがあれば、お気軽にご連絡ください。

季刊じば Vol.5
SPRING 2018
2018年4月15日発行

編集人: 一般社団法人 日本知的財産協会 会誌広報委員会
発行人: 一般社団法人 日本知的財産協会内 久慈 直登
<http://www.jipa.or.jp/kikansi/jipa.html>
印刷&DTP: NPC 日本印刷株式会社